

のろ
鉾津赤き溪ぞひの町霜げむる

石原八束

（昭和二十八年作 『秋風琴』書肆ユリイカ刊）

鉾毒の足尾銅山を訪ねた折の十四の中の一句。閉山前の時期である。〈鉾毒煙噓せる銅山町の冬茜〉〈鉾毒煙嵐し冬来る坑夫の町〉〈鉾毒煙天にむらがる冬の墓地〉〈赤崩崖の銅山肌尖る霜の天〉〈鉾毒煙北風吹く今日も墓地を這ふ〉等に続く句である。

八束の若い時の句には、先の〈原爆地子がかげろふに消えゆけり〉や、この鉾山の句など、社会批評を多分に含んだものがある。「社会性俳句」と呼ばれることを本人が嫌ったのかどうかは分からないが、父の石原舟月が実業家としても「雲母」の俳人としても力があつた事情もどこかにあつただろう。実際に現地へ足を運び社会批評の句をかなり詠んだ割には、その面はあまり評価されていない。

ところで、冒頭の句は、谿沿いに銅の赤色の鉾津が積み上げてあるのだろうか。「赤い鉾津」に負の美意識を感じる。それは、爛れた文化の傷跡の色合い。この鉾山の谷間には、労働力が集まり、銅という宝物にすぎるように町ができてしま

つていた。時代に翻弄された人々の運命を、八束は醒めた目で見つめ、怒りは心の奥に隠らせて、しずかに嘆く。

その心情を表すために、八束は季語の二重性を活用する。町全体がこの世の幻であるかのように「霜げむる」というのだ。この季語によって、この句は客観写生のルポルターージュからしずかに離れ、心象的な句として完結する。

鉾山に棲みついた人々の運命の哀しさを、わが身に照らしながら抑制した心象句として後世に伝えること。それが八束のしずかな社会批評の態度でもあつた。

私自身は、足尾銅山の鉾毒が流れ出して全滅した渡良瀬川下流の谷中村に隣接する古河市に住みながら、足尾を訪れる機会がなかった。この八束作から六十六年後、高崎句会の原田要三さん達にご案内いただき、昨年ようやく当地を訪れた。植樹活動によって山はかなり生命感を取り戻していたが、いくつかは尚、はげ山のまま晩秋の光に個性を消された岩肌を晒し、大きく威圧してくるのであつた。

はげ山の晩秋アノニマスの威容 正美

と詠んだのもこの時である。今は寂れてしまったこの町の端に、戦時下徴用された朝鮮人たちの碑があることも後に知ったことだった。

■ 続・らくだ日記（七十三） 佐怒賀正美 ■

秋の夢さめて灯ともる心の座 石原八束

（昭和二十六年作『秋風琴』所収）

句集題の「秋風琴」は昭和二十六年作の章題にもなっている。「晩春発病して以来の病状七月に至りて俄かに悪化し、喀血六度七度と重なりて止らず——愚かなる人生の一頁にしるす、三十二句」の前書をおく。上掲の句は、（梅雨霪（はげ）し血を喀く夜の闇底に）血を喀くや梅雨の疊に爪をたて（血を喀いて大夕焼の中に臥す）血を喀（は）いて眼玉の乾く油照り）等と収められている。八束の表現主義的な尖鋭な感覚の並ぶ句の中に、この句を見るとほっとする。

この句には「再び山廬先生の見舞を受く」という前書がある。山廬先生とは、八束の師の飯田蛇笏のこと。「雲母」をやがて飯田龍太が引き継ぎ、二人は袂を分つが、ライフワークになった評伝『飯田蛇笏』の労作に見るように、八束の蛇笏への敬意は生涯衰えることがなかった。この句には、ひいやりとした幻想の中に目覚めたような雰囲気を感じるが、見舞に來られた蛇笏先生の姿を認めて、彼の世とこの世のあわいに得た小さな幸のように、ほんのりと「心の座」に灯りが

ともったというのだろう。少々さびしかな雰囲気もただようが、虚飾のない空気が感じられて、なかなかよいものだと思う。ところで、句集名『秋風琴』の由来をときどき尋ねられることがあるが、次のような由来らしい。この題の名付け親は、八束の師事した三好達治であった。三好詩人は「春風琴」「秋風琴」の二つを提案された。それに応じて、八束は「大阪の玉堂作の秋霜の気品を思い出して、後者をいただくことにしたのである」（『秋琴帖』「雲の衣裳」）。実際、戦禍と病弱を抱える青年期を過ごした八束には、「秋」こそ親しかつたに違いない。（ちなみに、浦上玉堂の二人の息子の名前は春琴と秋琴であった。）

「大阪の・・・」というのは、昭和二十二年秋、飯田蛇笏に従って一カ月余の関西旅行をした際、帰りの大阪の旅館の八束の部屋に掛かっていた玉堂の青墨画を指している。蛇笏の部屋には竹田（ちくでん）の細密画が掛けてあったという。八束の書齋や客間には、田能村竹田の細密画や、浅井閑右衛門の油絵「黒薔薇」、三好達治の色紙等が掛けていたり、中国から持ち帰った大きな壺が置かれていたり、それらを眺めながら先生の現れるのを待つことも楽しかった

■ 続・らくだ日記（七十二） 佐怒賀正美 ■

沈黙の石霜の石笑ひ石 石原八束

（昭和五七年作・『白夜の旅人』角川書店刊）

三十八年前、私が二十六歳の頃、先生のお膝元の汐見坂句会で出会った作品。年の暮で、膝を突き合わせて先生と弟子たちが向き合うかのような小さな和室での句会だった。先生は、他に〈沈黙の石動きけり霜の海〉〈眼の奥に穴の闇あり年つまる〉の二句を出された。

このとき、私は先生の句を三句とも第一・二・三席と揃えて頂戴してしまったのだった。「物」への接し方に愚直とも言えるあたたかみを感じたのである。そのときの先生のややはにかんだような表情も忘れられない。その頃、先生は六十三歳。今の私くらいだ。それにしても貫禄がおりだった。

改めてこの句を見ると、何の変哲もない石に対して、旧知である者と対話するかのようじつくりと向き合つて表情を引き出す。その結果として、対象物の中に作者自身の胸中が映し出される。心の中で見つけた「沈黙の石」「霜の石」「笑ひ石」は、やがて「石」の三つ重ねになって、何とも言いようのないユーモアを届けてくれる。それは苦境を何度も

潜り抜けてきた八束の、自らへまた読者へさし向けられた

「笑ひ」とも言える。

ところで、この石への嗜好は、やがて、

あこや貝の我に月光玉六つ（平成二年）

というユーモア句を生む。前書に「入院月余、特大結石六個を摘出 四句」とある。あこや貝とはもちろん真珠ならぬ「結石」を抱えた八束自身を自嘲したもの。

ともあれ、入院されていたことも知らぬまま八束居を訪ねたのは退院後一週間くらいだったか。体調もだいぶ恢復されて、ひさびさに寛がれている様子であった。あこや貝の話も急に出た。「結石の大きなのが六つ。それを手術で取り出したんだけど、腹に石がたまつて、それでひっくり返ったから、イシハラというわけ」と、愉快そうに笑われた。入院中にこの洒落を考えていたのか、咄嗟のウィットだったのか。先生が七一歳の頃の話である。

『モン・パリ』を凌ぐ自由な想像力。当時、五つ子はいたが、六つ子はいたかどうか。しかも、そこに月光を流し込んで、幻想的とも神秘的ともいえる不思議な抒情を感じさせるあたりが、八束の句の豊かさでもあった。

■ 続・らくだ日記（七十一） 佐怒賀正美 ■

瘤の幹抱けば虚空や灌桜 石原八束

空わたる陽炎のあり灌さくら

（平成八年作・遺句集『春風琴』に所収）

日米俳句大会の前年であったか、駐日米国副大使夫人のクリスマスイン・デミングさんをお招きしての「秋」の吟行会での作。東京から大型バス二台で、総勢一〇六名が福島県三春の紅枝垂桜の千年樹を觀に行つたのだった。このときは当時「秋」の同人だった加舎逸子さんがデミングさんの通訳を務めた。このときは、例年よりもすこし開花が遅れていたようだったが、せいぜい三分咲きくらいなら想像力とこれまでの体験でなんとかでつち上げられる、くらいに思っていた。しかしながら・・・。

現場に到着して、斜面になった畑の中腹に聳えていた灌桜が視界に入った途端、皆は言葉を失った。花びらが、ほとんどない。一分咲きどころか、一厘咲きにも及んでいない。困ったなあ、と皆顔を見合わせながら、ともあれ桜の傍まで足を運んだのだった。

困ったなあと思ひながら、デミングさんを見ると、八束

先生と加舎さんと和やかに話をされている。誰かが、「先生、ここに一輪！」と声を挙げると、近くまで足を運んで、枝に手を伸ばして慈しむように花を愛でておられる。しばらくの時間をゆつたりと過ごされ、ご満悦のようであった。私自身も、「これが俳人か」と妙に感動していた。

二時間ほど過ぎた後、バスに戻り、帰りの車中で先生が選を発表された。その折の先生の句を見て驚嘆した。一句目は、中に空洞のある老樹の「瘤の幹」を抱いて、その幹の真上に虚空を感じた、というのである。二句目は、満開の灌桜が風に流れ落ちてくるように幻想し、その空を陽炎が渡っているように感じ取つたのだ。虚の風景だが、心象的にはよりダイナミックに深い印象を刻むことになった。

その後、吟行記を「俳句」（一九九六年七月号）に発表することになり、老川敏彦さんと私が指名された。二頁分なので、前半を老川さんが後半を佐怒賀が書くようにということになった。数日後、喫茶店で合流。そこで老川さんはすらすらと原稿を書き上げてしまった。「こんな感じでいいかな。あとは佐怒賀君、家で書いていいよ」。亡き老川さんを偲ぶとき、この「共同作業」が懐かしく思い出される。

■ 続・らくだ日記（七十） 佐怒賀正美 ■

柚子咲いてあなた中有は明日まで 池田澄子

（句集『此処』二〇二〇年刊・朔出版）

集中、特に「中有」の章に惹かれた。ご主人を亡くされたときの一連の作だろうが、この句の前後の好きな句を引くと、
〈なきがらや雨戸を繰ると花の朝〉〈未亡人にスマレすずらん
そして雨〉〈古今東西ときに人泣く木々芽吹く〉〈柚子咲いて
あなた中有は明日まで〉〈おはようと写真に言つて夏に入る〉
〈木下闇ときどき亡夫がこちら見る〉など。上掲の句は、四
十九日の前日、「柚子の花が咲いたわよ。あなた、この世に
留まれるのは明日までよ。しつかり旅だつてね」というよう
な心の中の語りかけであろう。「あなた」という日常の呼び
かけの言葉が親しく響く分、今生の別れの辛さもしづかに伝
わってくる。肉声がそのまま届く口語体の効果であろう。
〈迎え火に気付いてますか消えますよ〉〈あつ彼は此の世に居
ないんだった葉ざくら〉も同様。本集は、第七句集。二〇一
五年から二〇二〇年までの三八〇句を収める。後記によれば、
師・三橋敏雄の死後、育ての父、母、夫と世を去り、この句
集については「句集を纏めることで自分を区切り、僅かの未

来を、死別に怯えずに一度生きてみたいと」の新たな志をも
つて編まれた。冒頭の句も、この一連の身近な人の「死」の
流れの中で、ついに来てしまった最愛の夫との永訣を刻んだ
もの。一見軽そうだが、内実は深い。たとえば、〈桜さくら
指輪は指に飽きたでしよ〉なども、無頓着風ながら、深い心
情を抱えて、冒頭の句があると、それへの伏線を成している
ようにさえ感じられてしまう。人との別れがあるからこそ人
への思いは深くなるのであろう。〈逢えぬなら思いぬ草紅葉
にしゃがみ〉〈逝きし人々木の葉しぐれの光の中〉なども印象
深い。一方で、作者は人間、動物、植物などすべての命を寿
ぎ愛でる。〈チューリップ雨を丸めて可愛くし〉〈そよかぜや
変わりようなく君は蛇〉〈花の夜の少し残っているいのち〉〈幸
せそう芋殻の中に居る煙〉〈次の世は雑木山にて芽吹きたし〉
〈長生きのあるとき蕪の葉が綺麗〉など、命あるものへの同
等な心の交歓を楽しんでいる様子が窺える。

本集の掉尾は、〈シヨール掛けてくださるように死は多
分〉〈生きるときに春ならこの口紅〉の二句。「くださる」
に應えるように「春ならこの口紅」を留意しておくというの
だろう。生の終点での秘めやかな交歓を示唆する。

屋根といふ屋根は鮫色東風荒れて 沼尾将之

（句集『鮫色』（二〇一八年刊・ふらんす堂）

作者の沼尾さんは昭和五十五年生まれで「橘」同人。松本旭、佐怒賀直美と主宰二代にわたって師事しながら、一昨年の秋に第一句集を編まれ、このたび俳人協会新人賞を受賞された。この句集にはこの十年間の作品が収められている。もともと美大の油絵学科を卒業、さらに、『マルテの手記』の「僕はまずここで見ることから学んでゆくつもりだ」の一文に共感した、とある。見過ごしていたものを見ることによつてとらえ直す、という謙虚な姿勢が本句集を貫いている。

まず、〈目瞑りて亀は顔出す盆の昼〉〈旅鞆車窓の冬日避けて置く〉〈削りたての杭打ち込まれ冬の道〉〈舟つくるやうに西瓜に匙入れて〉など客観写生の確かな視線を感じる。対象を具体的に捉えていて、特に〈目瞑りて〉の句は、上五中七に独自の発見がありユーモラスだ。

さらに、〈光沢は星よりのもの凍豆腐〉〈夏蝶の蛹か黄金（きん）の葉莢か〉〈鷹渡る潮の匂ひの吹つ飛ぶ日〉〈風の芯眉間に

捉へ冬鷗〉などはいわゆる主観写生になるが、どれもしつかりした視線に感覚が引き寄せられて、無理のない句に仕上がっている。特に、「鷹渡る」「風の芯」の句は力がこもっている。

また、同じ主観的写生の句でも、〈唾を吐くやうに打ちやる古日記〉〈瘦案山子夜は懺悔をして眠る〉〈暗がりのもの見え始め蚯蚓鳴く〉〈綿虫に吸ひ寄せられてゐて独り〉などは、内面的な翳りが感じられる。

ところで、もちろん分かりにくい句も時にはあるが、それらの中で〈能面を凝視の果ての蕪かな〉〈言葉すぐ活字にやをら薄氷に〉などは推敲によつて、読み応えのある句になるような可能性を感じたことを付記しておきたい。

冒頭の句の、「鮫色」は〈梅咲いて庭中に青鮫が来ている金子兜太〉のアオザメ色だろう。たぶん、実際の青い屋根ではなくて、実景から浮き上がって心理的に押し寄せてきた色彩なのであろう。「東風荒れて」たたみかけるリズムから、明るい色彩がいちめんに波打っているようなイメージを描いた。この若い作者には、自分の眼と感覚を信じて、どんどん句の世界を拡げて欲しい。

■ 続・らくだ日記（六十八） 佐怒賀正美 ■

泳ぐ娘のタトゥーの模様波の模様 マブソン青眼

（句集『マルキーズ諸島百景』二〇二〇年・pipu刊）

A kau te vehine / Te ata o to Ia patutiki / Ata o te naitai

（マルキーズ語）

Une vehine nage / Motifs de ses tatouages / Motifs des

vagues（フランス語）

マブソンさんの今回の試みは、四季の変化のない自然に包まれた人間生活を詠んだら無季俳句は自然に成り立つのかどうか、という大胆な冒険である。季節循環がなくなれば、島は宇宙の時間の中にすっぽり包まれてしまうのではないかと点としての悠久の時間。

マブソンさんは昨年から「様々な事情があつて」日本を離れ、マルキーズ諸島のヒバオア島で一人暮らしを始めた。かつて画家のポール・ゴーギャンや詩人で歌手のジャック・ブレールなどが最晩年を過ごした小さな島である。実は、昨年逝去された中村寒郎さんは若い頃ゴーギャンに惹かれてヒバオア島に渡った。これも何かの偶然かと思う。

本句集では、日本語、マルキーズ語、フランス語で書か

れている。使い分けを比較して読むのも面白い。〈南十字竜の口かと思う夜も〉(La Croix du Sud / Certaines nuits se transforme / En gueule de dinosaure)は、フランス語では夜が複数形に、「竜」がdinosaurre になっている。その他、特に注目した句を挙げれば、〈ゴーギャン墓碑女像の乳首を触れば死す〉〈マルキーズは一妻多夫や銀河笑う〉〈爺の爺、人食いだったよ〉日焼けの子〉〈謳い出せば教会中に花冠の香〉〈窓開けてジャングルの霞を朝食とす〉〈恋語る 倒れし椰子の幹がベンチ〉〈干しバナナをバゲットに挟み海風食む〉〈驟雨前の匂い覚えて吾も島民〉〈賛美歌の多声はマンタの飛翔かな〉〈ヒトが来る前から魂はここにいた〉など。

さらに、冒頭に掲げた句などは、祖先からの風習を織り込みながら、タトゥーのあり方が清新で波の模様溶け合っている永遠の親和性を感じさせる。この若い娘はタトゥーがあることよって、波に海に溶け合い、永遠の命になっているかのようだ。〈苦の多き地球の臍にしあわせのしま〉で癒される瞬間でもあろうか。マブソンさんまたお会いできる日までお元気で。

■ 続・らくだ日記（六十七） 佐怒賀正美 ■

半夏生父に習ひしくさび打つ 米山光郎

（平成一六年作・句集『どんどの火』二〇二〇年・ウエップ刊）

米山さんの第四句集をいただいた。全体的に穏やかな落

ち着きを感じさせる作品が並んでいる。集中いくつかの主題があるが、その一つは父母を讃える句である。父母を詠んだ句では、他に〈捨て鋤に父の名のある霰かな〉〈桜鍋ぐつつ父の句ひなる〉〈そばの花仏壇にさし母卒寿〉〈百寿近き母が病葉拾ひけり〉〈竜の玉握りて母の百寿なる〉〈花の夜母に歌あるあかるさに〉等、佳品が並ぶ。母の句では、特に「竜の玉」の句に円満な祝意が感じられてめでたい。現在一〇六歳との由、ご健康を願うばかりである。

上掲の父を詠んだ句では、かつて父にくさびの打ち方を習い、それを半夏の頃に思い出しながら実践しているという。樹木の支えか、家屋などの補強か、この句では何にくさびを打つのかは明記されていないが、その分「くさび」が暗喩的な意匠をまとう。来たるべき暑さに供えて、自分の心にくさびを打ち込んでいるようにも感じ取れるのである。父の自制

の効いた厳しい心構えの継承のあり方とも読める。父親は厳しいというのが世間の相場で、この句も例外的ではないが、「きびす」という具体的なモノを梃子にして一句のダイナミズムを生み出しているところが面白い。

作者の農を基盤にした甲州の山河を見つめ、そこに生活する人間を浮き彫りにする句風は若い時から一貫しているが、その意味で今句集の中に佳品を探れば、〈捨て鋤に父の名のある霰かな〉〈春泥や研師を葬る列が見え〉〈蛩とぶ捨田の奥の畦仏〉〈冬満月竿になる竹そろへあり〉〈風強き野鍛冶の墓の鼓草〉〈稲を刈る鎌の光をこぼしたる〉などの完成度の高い作にたどり着く。

また、〈夏やせの力のぬけた話かな〉〈草の穂を握れば先の世の温み〉〈かたつむり詩詠む冥さありにけり〉〈でで虫を手遊びせる終戦日〉など、晩節を意識した句にも諧謔への試行が進んでいて、その中に「軽み」らしき言葉のあしらいも見える。〈神領へ二百十日の猫走る〉というユーモアも、この「猫」を「にんげん」に置き換えて成り立つような、寓意性を秘めていて、なかなか味わいの深い句である。米山さんの句境がここまで進んでいることをまずは喜びたい。今後の展開も楽しみにしたい。

われら残像光年の銀河の友よ

秋尾敏

（平成25年作・句集『ふりみだす』所収・本阿弥書店刊）

とんでもない句集が出た。面白いと感じた句にチェックしていったら、ゆうに九十句を超えた。その理由はあとがきを読めば分かる。

「俳文芸は、古典に対しても、社会状況に対しても、〈軽やかなつまみ食い〉を続けてきた。だから私も、そのように俳句を詠み続ける。古典も古語も、近代的自我も写生も、俳句はすべて〈軽やかなつまみ食い〉をすればいいのである。／そうした俳句が〈浅い〉ということにはならない。ポップに〈軽やかなつまみ食い〉をする俳句こそが、もっとも深い表現を続けられると、私は信じている。」なんといさぎよいことよ。

たとえば、〈学校の柳が髪をふりみだす〉は、実景が下敷きにあるうが、縛りの多い学校制度に対して思春期の生徒が奔放に時に反抗的にはみ出ようとするような姿を感じる。以前、この欄でも紹介させていただいた〈コンビニを怖じる少年春の雨〉（「秋」二〇一五年四月号）や、〈蓮の花夜更けて水になる少女〉秋霖の少女が傷を舐めているなど、もともと作者は社会に馴染みにくい若者に対していつも愛情の目を注いでいる。ポップと言っても問題意識は浅くない。

さらに、〈亀の甲羅で戦前が灼けている〉〈風鈴の誰も覚えていな

い歌〉〈霧重き砂丘滅びの坂いくつ〉〈浮かびきれない水あり夜の森〉〈万緑の森わたくしは添加物〉〈生と死を足して私という桔梗〉〈卯の花腐し書庫に刃物の二三本〉〈年の暮雲から雲へ跳び移る〉〈海亀の時間を砂に擦り合わす〉など深い時間が詩となってひよいとこの世に躍り出たかのような印象の句だ。

そして、もっと現代の時流や世相を直観的につかみ取ったポップの句なら、〈ディズニーの青い秒針星契る〉〈流れ星パスタの方が早く来る〉〈走り蕎麦街のガラスに老けてゆく〉〈完璧なメドベージェワが涙を擽む〉〈秋をググって 아이폰 の演歌〉〈バイク息んで猫の子を生み落とす〉〈さわさわと露は内裏を運ばれて〉など。とりわけ、メドベージェワの句は印象鮮烈で笑って見守るような温かさがある。一方で、時代・戦後・大震災・大洪水など世情に向き合った批評性の強い句も無視できない。〈生身魂銃後の虹を語りだす〉〈原発に下萌ゆるとは怖ろしき〉〈掃海という荒仕事雲の峰〉〈江青の自決ハンモックをたたむ〉〈線量を剥がれるように夏の蝶〉〈草笛を帰郷の俘虜として汚染〉〈霧は道づれ戦後に長い裾野がある〉など。

最後に、冒頭の句だが、〈光陰を握り返して今年の掌〉〈夢は見たかと黄金の蛇隠る〉と併せて読みたいような鎮魂句。光陰の銀河へ去った友から見れば、現世の我々は残像のようなものかもしれない。それでも、刹那の生の時間を更新しながら、夢を追い続けて一生を閉じることになるのだ。